

書評：『『大乘莊嚴經論』第Ⅱ章の和訳と注解—大乘への帰依—』
（龍谷大学仏教文化研究叢書 40） 『大乘莊嚴經論』研究会編
法蔵館 2020年5月30日 viii + 320頁 B5判

高橋晃一

昨年5月に法蔵館より、『『大乘莊嚴經論』第Ⅱ章の和訳と注解—大乘への帰依—』が出版された。同シリーズとしては、『『大乘莊嚴經論』第Ⅰ章の和訳と注解—大乘の確立—』（2009年）、『『大乘莊嚴經論』第ⅩⅦ章の和訳と注解—供養・師事・無量とくに悲無量—』（2013年）に続き、待望の第三巻となる（以下ではそれぞれ、『第Ⅱ章—大乘への帰依—』・『第Ⅰ章—大乘の確立—』・『第ⅩⅦ章—悲無量—』と略す）。『第Ⅰ章—大乘の確立—』がA5判サイズであったのに対して、『第ⅩⅦ章—悲無量—』からはB5判と大きくなり、また巻を重ねるごとにその内容がますます充実してきている。例えば、『第Ⅰ章—大乘の確立—』はサンクスリット校訂テキストと和訳が対照されていたのに対し、『第ⅩⅦ章—悲無量—』はチベット語訳と漢訳も付された。さらに今回出版された『第Ⅱ章—大乘への帰依—』では、安慧釈と無性釈のチベット語訳校訂テキストとそれぞれの和訳が付されている。また、このシリーズの特徴として、単なる「和訳と注解」にとどまらず、研究会参加者による附論が掲載されており、『大乘莊嚴經論』の新出写本や、これまでほとんど研究されていないヴァイローチャナラクシタやサツジャナの注釈に関する最新の写本研究の成果を収録している。本篇であるサンクスリット原典は、レヴィ刊本を底本とし、龍谷大学所蔵の写本二本と、Nepalese-German Manuscript Cataloguing Project (NGMCP) の写本二本に加え、上述の新出写本とヴァイローチャナラクシタなどの注釈を用いて校訂している。また対照されている和訳は原文の趣を損なわないようにしながらも、日本語として自然な訳になっている。

このような資料・訳注としての完成度の高さに加え、同シリーズでは『大乘莊嚴經論』を中心とした思想史についての考察が行われてきたが、今回の『第Ⅱ章—大乘への帰依—』では従来の説をより精緻にまとめた論が展開されている。同シリーズが考える思想史の問題は、特に次の二つが重要である。まず瑜伽行派の思想形成において、『瑜伽師地論』系統と『弥勒論書』

系統という二つの系譜があったとしていること、また『大乘莊嚴經論』の思想において五事説が重要な位置づけにあったと考えていることである。

初期の瑜伽行派の文献は、成立過程や相互の関係に不明な点が多い。一般に「弥勒の五部書」と言われているものも中国とチベットで伝承が異なり、『中辺分別論』と『大乘莊嚴經論』だけが両伝承で共通している。また『大乘莊嚴經論』は『瑜伽師地論』の古層とされる『菩薩地』の章構成を継承していることはよく知られているが、『大乘莊嚴經論』と『菩薩地』の内容はかなり異なっている。一般的に、これらの文献については、漢訳年代などから成立時期を推測し、思想的に関連性のあるものとして扱われている場合が多い。しかし、荒牧 [2013] および荒牧 [2020] では、『瑜伽師地論』系統と『弥勒論書』系統を分け、瑜伽行唯識思想の発展を説明しようと試みている。詳しくは、荒牧 [2020:219-220] (荒牧 [2013:17-18] で提示された二系統説に修正を加えたものと思われる) にまとめられているので、そちらを参照してもらいたい。要点だけを示すと、『瑜伽師地論』系統の背景としては、『十地経』『第六地』の菩提分法と龍樹の二諦説を観察する菩提分法を基礎として『菩薩地』の修行道が完成し、次いで『解深密経』、さらに「本地分」が編纂され、その構成を踏まえて「撰決撰分」が成立したとされる。一方、『弥勒論書』系統は、『大集経』『如来蔵経』『勝鬘経』などの影響下で『宝性論』が成立し、次いで『法法性分別論』が『菩薩地』や「撰事分」の影響を受けながら作成され、その後『大乘莊嚴經論』が成立する。『瑜伽師地論』系統の論書の成立順序については、おおむね今日の学界の通説と一致しているが、『弥勒論書』系統の成立順序については、異論もあるかと思われる。それはともかくとして、両系統は相互に影響しあいながら発展したとされるが、荒牧 [2013:17-18] の対照表を見る限り、基本的には『瑜伽師地論』系統から『弥勒論書』系統への影響が想定されている。『第二章—大乘への帰依—』の序説(2頁)では、この二系統を阿含経典(特に『雑阿含』)から『瑜伽師地論』(「本地分」中『声聞地』・『菩薩地』など)へ連なる系譜と、大乘経典(『般若経』・『大集経』・『解深密経』など)から弥勒論書(『中辺分別論』・『大乘莊嚴經論』・『法法性分別論』など)へ連なる系譜にまとめ直しているが、本質的には文献に着目した系統分けというよりは、菩提分法を基礎とした菩薩の実践行の発展を軸に考えられた系譜であると思われる。同シリーズの執筆者の間では、この考え方が共有されているようである。今後、瑜伽行派研究の一つの課題として議論されていくことになるであろう。

さて、もう一つの課題である『大乘莊嚴經論』における五事説の意義については、『第一章—大乘の確立—』所収の荒牧 [2009:143,152] で問題提起がなされていた。これに対して『第二章—大乘への帰依—』に収録された荒牧 [2020:216-223] では、ひとまずの回答を提示したように思われる。そもそも五事説とは、相・名・分別・真如・正智という五つの概念によって真実の意味 (tattvārtha) を説明しようとする瑜伽行派特有の思想であり、管見によれば『瑜伽師地論』の古層に属するとされる『菩薩地』『真実義品』の思想を分析する過程で形成されたと考えられる(高橋 [2005b:34-41] 参照)。三性説に比べるとあまり注目されてこなかった思想だが、この五事説が『大乘莊嚴經論』の思想の中核を成しているとする解釈は非常に興味深い。

荒牧 [2020:216-217] で示されているように、『大乘莊嚴經論』は第一章第一偈で、「極上乘の方軌 (uttamayānadeśitavidhi) が説かれた教法」について言及し、第二偈でその教法の意義を五つの譬喩で説き明かしている。世親釈によれば、それらの譬喩には「五つの意義」が込められている。すなわち(1)「成就されるべきもの」(sādhya) (2)「仔細に理解されるべきもの」(vyutpādyā) (3)「思惟されるべきもの」(cintya) (4)「思惟すべからざるもの」(acintya) (5)「証得の対象である完全に成就せるものであって、菩提への助成分であることを本質とし、各自が内に自ら知るべきもの」(pariṣṣannaṃ cādhigamārthaṃ pratyātmavedanīyaṃ bodhipakṣasvabhāvaṃ) である。これら五つの意義について、無性釈と安慧釈は瑜伽行派の教理である五事説、三性説に当てはめて解説し、また三種類の人に対して、それぞれ異なる目的をもって説かれた教法であることを明かす(詳しくは『第 I 章—大乘の確立—』の注(10)(11)(12) (89-95 頁)を参照)。それぞれの対応関係は、以下のようになっている(『第 I 章—大乘の確立—』168 頁参照、三種類の方は割愛した)。

	『大乘莊嚴經論』の五つの意義	五事	三性
1	成就されるべきもの(sādhya)	名(nāman)	遍計所執性(parikalpitasvabhāva)
2	仔細に理解されるべきもの(vyutpādyā)	相(nimitta)	依他起性(paratantrasvabhāva)
3	思惟されるべきもの(cintya)	分別(vikalpa)	依他起性(paratantrasvabhāva)
4	思惟すべからざるもの(acintya)	真如(tathatā)	円成実性(pariṣṣannasvabhāva)
5	証得の対象である完全に成就せるものであって、菩提への助成分であることを本質とし、各自が内に自ら知るべきもの (pariṣṣannaṃ cādhigamārthaṃ pratyātmavedanīyaṃ bodhipakṣasvabhāvaṃ)	無分別知 (nirvikalpajñāna) =正智 (saṃyagjñāna)	円成実性(pariṣṣannasvabhāva)

荒牧 [2009] は、世親釈で五つに分けられた教法の意義が、無性や安慧という注釈家達によって五事説や三性説と関連付けられている点を重視し、『大乘莊嚴經論』が説こうとする真理がなぜ五事や三性と言えるのか、また五事や三性という根本真理は瑜伽行唯識思想において「いつ、どの段階で、どのような意義をもって」説かれるようになったのか、という問題提起をしている(荒牧 [2009:143])。この問題は先の瑜伽行派の二つの思想系譜とも関連しながら、『第 XVII 章—悲無量—』所収の荒牧 [2013] でも触れられるが、今回出版された『第 II 章—大乘への帰依—』所収の荒牧 [2020] において、一つの結論が示されたように思われる。すなわち、『大乘莊嚴經論』第一章「大乘仏語論証」の第一偈は、最上乘である大乘の目的を知る人こそが、方便と智慧の行を説く大乘經典の目的を解明するというを述べているのであり、その方便と智慧の究極の目的は、世親釈にまとめられる「五種の存在」の修行であると宣言している、との解釈である。そして、この五種の存在を、相・名・分別・真如・正智からなる「五事の真

実」であると解釈し、それこそが「大乘經典を佛語たらしめ大乘たらしめる究極の目的」であると述べている（荒牧 [2020:216-217]）。そして、先の瑜伽行派の二系統のうち、『瑜伽師地論』系統が「三無自性」「三性」を宣揚したのに対抗して、『弥勒論書』系統では、新たに「五事」の真実を宣言する必然性があったとし、『大乘莊嚴經論』の冒頭第一偈と第二偈がその宣言であったと述べる（荒牧 [2020:221]）。荒牧 [2020] の主張は五事説を再評価するという点で興味深い。しかし、世親釈が示すのは、あくまで「五つの意義」であり、五事との関連付けは無性や安慧によって行われている。「五つの意義」がいわゆる五事の言い換えであったか否か、慎重に検討する必要がある。

ちなみに、『大乘莊嚴經論』では第 XIX 章「功德品」において、四尋思・四如実智を説明する一連の偈の中で五事に関連する概念に言及している。以下、偈のみを引用する（詳細は高橋 [2005a:32-35] 参照）。

（四尋思）

名称と事物は相互に偶然的なものであることに関する尋思と、それに対する二種類のものに関する仮説がそれ（仮説）のみであることに関する尋思がある。 //47//

（四如実智）

そして、すべてについての非知覚に基づいて、四（如）實智が、すべての利益を成就するために、勇猛な人々に、すべての地において生じる。 //48//

抛り所と享受物と（それらの）種子が、束縛の（因）相（nimitta）であり、一方、基体を伴い、種子を伴う心心所が、そこに束縛される。 //49//

目の前に立てられた（相）と自ずから立っている相があるが、すべてを除去しようとしている智恵ある人は、最高の悟りを得る。 //50//

真如を対象とする知は二取（dvayagrāha）を離れており、龐重身を直感するものであり、それを滅するために、智恵ある人々にあると認められる。 //51//

真如を対象とする知は、多様なものとして現れず、存在することと存在しないことの意味を直感するものであり、分別に対し自在と言われる。 //52//

真実を覆い隠し、愚者たちには真実でないものがあらゆる点で現れる。一方、それを取り去って、菩薩たちには真実があらゆる点で現れる。 //53//

非存在の対象と存在する対象が、（それぞれ）顕現しないことと顕現することが転依であると理解されるべきであり、思いのままであるから、それが解脱である。 //54//

大いなる境界は相互に同類のものとしてあらゆる点で現れるが、障害となる。したがってそれを正しく理解し、捨て去らねばならない。 //55//

MSA p.168.18-19:

āgantukatvaparyeṣā anyonyaṃ nāstavastunoḥ/
prajñapter dvidvidhasyātra tanmātratvasya caiṣaṇā//47//

MSA pp.168.26-170.16:

sarvasyānupalambhāc ca bhūtajñānaṃ caturvidhaṃ/
 sarvārthasiddhyai dhīrāṇāṃ sarvabhūmiṣu jāyate//48//
 pratiṣṭhābhogabījaṃ hi **nimittaṃ** bandhanasya hi/
 sāsrayāś cittacaittās tu badhyante 'tra sabījakāḥ//49//
 purataḥ sthāpitaṃ yac ca **nimittaṃ** yat sthitaṃ svayaṃ/
 sarvaṃ vibhāvayan dhīmān labhate bodhim uttamāṃ//50//
tathatālambanaṃ jñānaṃ dvayagrāhavivarjitaṃ/
 dauṣṭhulyakāyapratyakṣaṃ tatksaye dhīmatāṃ matāṃ//51//
 sadasattārthe pratyakṣaṃ **vikalpavibhu** cocyate//52//
 tatvaṃ saṃchādyā bālānāṃ atatvaṃ khyāti sarvataḥ/
 tatvaṃ tu bodhisatvānāṃ sarvataḥ khyāty apāsya tat//53//
 akhyānakhyānatā jñeyā asadarthasadarthayoḥ/
 āsrayasya parāvṛttir mokṣo 'sau kāmācārataḥ//54//
 anyonyaṃ tulyajātīyaḥ khyāty arthaḥ sarvato mahān/
 antarāyakaṃ tasmāt pariñāyainam utsṛjet//55//

この個所に関する考察は高橋 [2005a] で詳しく行っているので、ここでは結論のみ簡単に述べる。『菩薩地』・「撰決択分中菩薩地」・『大乘莊嚴經論』に見られる四尋思・四如实智を比較すると、『大乘莊嚴經論』の説は『菩薩地』よりも「撰決択分中菩薩地」に近いと言える。五事説は「撰決択分中菩薩地」で初めて詳述された教説であり、また『菩薩地』「真実義品」の思想を前提としているので、『菩薩地』→「撰決択分中菩薩地」→『大乘莊嚴經論』(偈頌)という順番で四尋思・四如实智に関する思想が展開したというのが、評者の理解である。しかし、これは唯識文献同士の緩やかな親和性と連続性を前提とした結論であり、『瑜伽師地論』系統と『弥勒論書』系統が対立関係にあると考えた場合は、別な結論になるのかもしれない。近年、研究対象が細分化、個別化する傾向がある中で、同シリーズが瑜伽行派の思想史全体を俯瞰する解釈として、瑜伽行派の二系統の発展過程を提唱することの意義は、決して小さくないであろう。

最後になったが、同シリーズの編集を担当されている能仁正顕先生をはじめ、執筆に携わっている先生方の多くは、故長尾雅人先生が主催されていた『大乘莊嚴經論』の研究会(通称「長尾塾」)に参加されていた方々とのことが、『第二章—大乘への帰依—』の「はしがき」と「あとがき」に記されている。長尾先生が大切に研究されてきた成果を研究会の先生方が引き継ぎ、世に出そうと努力されていることには頭の下がる思いである。このシリーズが今後とも長く続いていくことを心より願う。

(終わり)

- 『第 I 章—大乘の確立—』 『『大乘莊嚴經論』第 I 章の和訳と注解—大乘の確立—』 自照社出版, 2009.
- 『第 II 章—大乘への帰依—』 『『大乘莊嚴經論』第 II 章の和訳と注解—大乘への帰依—』 法蔵館, 2020.
- 『第 XVII 章—悲無量—』 『『大乘莊嚴經論』第 XVII 章の和訳と注解—供養・師事・無量とくに悲無量—』 自照社出版, 2013.
- MSA *Mahāyānasūtrālamkāra*, ed. by Sylvain Levi, Paris, 1907.
レヴィ刊本 see MSA
- 荒牧典俊 [2009] 『『大乘莊嚴經論』第一章「大乘佛語論証」のいくつかの問題について』 『第 I 章—大乘の確立—』 自照社出版, 141-164.
- 荒牧典俊 [2013] 「序説」 『第 XVII 章—悲無量—』 自照社出版, 1-31.
- 荒牧典俊 [2020] 『『大乘莊嚴經論』第二章「佛・法・僧の三宝への帰依」 解題—何故に第二章は説かれたか—』 『第 II 章—大乘への帰依—』 法蔵館, 215-240.
- 高橋晃一 [2005a] 「四尋思・四如实智に見られる思想展開」 『仏教文化研究論集』 5, 24-44.
- 高橋晃一 [2005b] 『『菩薩地』「真実義品」から「撰決撰分中菩薩地」への思想展開— vastu 概念を中心として—』, 山喜房仏書林.

Book Review: *Mahāyānasūtrālamkāra, A Japanese Translation and Annotation of Chapter II: Taking Refuge in Mahāyāna (Ryukoku University Buddhist Culture Research Series 40)*

Summary

Compared with the previous publications (i.e., the first and second volumes) of this translation series, *Mahāyānasūtrālamkāra, A Japanese Translation and Annotation of Chapter II: Taking Refuge in Mahāyāna*—the series' third volume—is a work of higher perfection with more informative contents and materials. It newly includes the text and translation of Sthiramati's as well as Asvabhāva's commentary. It also contains the latest results of research on the manuscripts of Vairocanarakṣita's and Sajjana's commentaries which have hardly been examined in research so far. It offers a translation in natural Japanese while retaining the taste of the original text. Regarding the problems of the history of Yogācāra thought, we can see the basic position of this book in the following two points. First,

it maintains that there were two lineages in the formation of Yogācāra thought: the line of the *Yogācārabhūmi* and that of Maitreya's treatises. Second, it situates the theory of *pañca-vastu* in the kernel of the thought of *Mahāyānasūtrālaṅkāra* that was one combined consequence of the two lineages. We find the contextualization with *pañca-vastu* in Stihiramati's and Asvabhāva's commentaries, and it is necessary to examine more carefully whether Vasubandhu's commentary expounded the *pañca-vastu* in the first and second verses of the first chapter. However, this book is highly significant in that it provides us with an overview of the history of Yogācāra thought.

キーワード 大乘莊嚴經論, 五事, 菩提分法, 菩薩地, 弥勒論書